

ID理論の学習スキルへの活用状況に関する一検討

A Study on Learning Skills with Instructional Design Theories

市川 尚

Hisashi ICHIKAWA

岩手県立大学

Iwate Prefectural University

鈴木 克明

Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院

Kumamoto University

＜あらまし＞ 筆者らは、インストラクショナルデザイン（ID）理論が教授の設計に限らず学習スキル（認知的方略）としても有用であるとの視点にたち研究を進めている。本研究では、大学の教職科目において受講生が学んだ ID 理論を、実際に自らの学びに活用しているのかについて、講義の振り返りの一環として調査した結果を報告する。結果として、ID 理論を自らの学習に活用する学生がいたこと、一方で意識はしたが活用には至っていない学生が多いことが明らかとなった。

＜キーワード＞ インストラクショナルデザイン、授業実践、学習スキル、認知的方略

1. はじめに

筆者らは、インストラクショナルデザイン（ID）理論が教授の設計に限らず学習スキル（ガニエの学習成果の5分類の認知的方略）としても有用であるとの視点にたち、研究を進めている（たとえば市川・鈴木 2012）。教えることは学ぶことにつながるとはよく言われているが、教えるための工夫は学びの工夫につながるはずであり、経験的にもそのように感じている。学習者が自分の学習をデザインできるよう、教授方略の基礎を教えるのも有効との見方がある（日本教育工学会 2000）。たとえば ARCS モデルは学習者が自らの学習意欲を高める作戦に活用できる（鈴木 1995）。一方で、ID 理論は教授を提供する側のための理論であり、学習者が自らの学習の工夫のために活用することは想定されておらず、研究レベルではあまり検討されてこなかった。

本研究は、大学の教職科目において受講生が学んだ ID 理論を、実際に自らの学びに活用しているのかについて、講義の振り返りの一環として、簡単にではあるが調査した結果を報告する。

2. 授業および調査概要

筆者はT大学2年次の「教育の方法・技術」を扱う教職科目において、「授業設計マニュアル」（北大路書房）をテキストとし、ID をもとに授業づくり、特に学習指導案作成を扱った講義を行っている（寺嶋ほか 2012）。講義内容のキーワードを表1に示す。学部構成が異なる2クラスに

同じ内容を教えており、受講生は各60名程度である。表1はおおよそ講義の流れに沿って並べており、①でIDに興味を持ってもらい、②で授業の出入口を明確にして授業企画書を作成し、③で教材分析を行い、学習指導案を作成する。

また、本講義では9教授事象の保持と転移を高める（事象9）、あるいはARCSの満足感(S)を意識し、学生には講義外でのID活用（応用機会の創出）を呼びかけてきた。それは(1)日常生活で自分が他者に教える場面で活用する、(2)自らの学びの工夫に活用する、の2つとした。呼びかけは注意喚起程度であり時間をかけておらず、講義の後半のスライドに1枚、学びにも工夫できるといった内容を紹介する程度であった。

上記の(1)(2)の視点を中心に、2012年度前期に2回、振り返り（調査）の機会をもち、②の最後に講義内でレポートを、③の後半にオンラインのレポートを課した。両方とも、本講義外で思い出した・活用した場面があったかを質問（自由記述）し、無かった場合はそのまま正直に書いて全く問

表1 講義で扱っている ID 関連キーワード

- ①キャロルの学校学習モデル、ガニエの9教授事象（+記憶のモデル）、ARCS モデル、ADDIE
- ②学習目標の明確化（目標行動・評価条件・合格基準）、学習成果の5分類（言語情報、知的技能、認知的方略、運動技能、態度）、前提条件、学習者分析、事前・事後・前提テスト
- ③課題分析（クラスター分析、階層分析、手順分析）、指導方略

題ないこと(成績には影響しないこと)を説明した。この振り返りは学生に上記(1)(2)を思い出すきっかけとする意図も含めている。

本稿では特に(2)の報告となるが、(1)では、塾講師、家庭、アルバイト、部活などにおいて、学習内容をある程度活用していることがわかった。

3. 結果

課題の提出者のうち、(2)学習の工夫に関する報告があったのは、2クラスあわせて1回目と2回目ともに59%であった。報告の中には、単にこうしたいという希望を述べた事例、思い出した工夫につながっていない事例、自分のやっていたことがIDに関連すると気づいた事例、実際に活用したという事例があった。また、授業づくりの視点から、他の講義をIDの視点で分析したという報告や、教えることが自分の学びにつながっているという実感などの報告も見られた。

実際に活用の報告があったキーワードとしては、9教授事象と記憶のモデル、ARCSモデル、学習成果の5分類、学習目標、課題分析、学校学習モデル、前提条件、事前・事後・前提テストなどであった。上記は、例えば9教授事象の事象2は学習目標、事象3は前提条件と関わるなど重なりはあるが、報告をもとに分けている。活用場面は家庭等での自習や大学での受講が多く、アルバイトも一部あった。報告の一部を表2に示す。

結果として、学習の工夫へのID活用は実際に行われていたことが明らかとなった。ただし、実際の効果まで報告している事例はあまり多くなく、活用していたとしても、実際に役に立ったのかまでは把握できていない部分もあった。

また、目標設定、目標と現状のギャップ分析、ADDIEプロセスなど、IDの考え方を日常の問題解決場面に利用できる、あるいは考え方の類似性に気づく報告があった。講義では特に問題解決の視点については扱っていなかったが、そもそもIDは問題解決思考であり、より広い視野で捉えている事例が若干ではあるが見られた。

一方で、単に希望を述べた事例や思い出しただけの事例が示すように、実際の活用に至らない場合も多かった。これは態度の問題であるが、学習スキルのようなメタ認知的なスキルは知識面だけでなく、実際の活用に至るまでの配慮が必要と言われており、今後工夫を考えていく必要がある。

表2 ID理論の学習スキルへの活用報告例

【ARCSモデル】ARCSモデルを意識しながらあまりすきではない教科の授業を受けてみました。関連性を考えて取り組んでみると何も考えていないときより内容が頭に入りやすく、満足感にも繋がりました。

【9教授事象】いままでなんとなく勉強していたのを改め、学習目標を決めてから勉強するようになりました。自分で家に帰ってから学ぶ際にはどの授業でも前提条件の確認、展開、学習の成果の評価を意識するようになりました。9教授事象にのっとり勉強すると、今何ができなくて、これから何ができるようになればいいのかが明確になるので学習の効率も上がったように思えます。

【学習成果の5分類】アルバイト中に新しい作業を教えてもらっている時、これは言語情報にあたる、あれは知覚技能にあたるなど考えるようになった。

【事前・事後・前提テスト】自分で学習を進める際に、頭の中で前提テストをイメージしてどの程度要点をおさえていて、その箇所は再度勉強すべきかどうかというものを考える。このことによって、無駄な学習時間を省き、有効に時間を使うことができている。

【課題分析】クラスター分析というものを知ってから、同時代の出来事等をマーカーで囲ったり、繋げたりしていつもとは違うレイアウトのノートを作ったところ、復習の際にととてもわかりやすかったです。

4. おわりに

本研究では、教職科目の受講生がIDを自らの学びの工夫に活用したかを調査し、実際に活用している事例が見られた。教える場面ではなく問題解決場面との類似性を指摘する学生もいた。一方で活用に至っていない学生が多いことや、活用の詳細な分析については今後の課題である。

注記：本研究は、科学研究費補助金若手研究(B)(課題番号：22700817)の助成を受けている。

参考文献

- 市川尚, 鈴木克明 (2012) 認知的方略の学習を支援する教材シェルの検討ーインストラクショナルデザイン理論の学習者による活用ー. 日本教育工学会研究報告, JSET12-1:333-336
- 日本教育工学会 (編) (2000) 教育工学事典. 実教出版, 「教授方略」, pp.210-213
- 鈴木克明 (1995) 第5章 授業の魅力高める作戦ーARCSモデルに学ぶ(1)ー. 放送利用からの授業デザイナー入門, 日本放送教育協会, pp.93-114
- 寺嶋浩介, 市川尚, 稲垣忠, 鈴木克明 (2012) 教職科目における「授業設計マニュアル」に基づいた指導上の課題の分析. 日本教育工学会研究報告, JSET12-2:25-28